ペトロ書簡（Ⅰ，Ⅱペトロ書）における愛の主題

The Theme of Love in the Petrine Letters (1 & 2 Peter)

原口　尚彰
Takaaki HARAGUCHI

1．はじめに

筆者は聖書における愛の問題の関心を持ち、旧約・ユダヤ教における愛の主題や、パウロ書簡における愛の主題や、ヨハネ福音書における愛の主題に関して考察を行って来た[1]。今回は、公同書簡に属するペトロ書簡（Ⅰ，Ⅱペトロ書）における愛の主題を採り上げて、一世紀末から二世紀初めの教会が、イエスやパウロの愛の教説をどのように継承し、展開していたのかについて考察してみたい。

ペトロ書簡における愛の主題の研究については先行研究が少なく、C・スピックが新約聖書の愛の教説をめぐるモノグラフの中でⅠペトロ書の愛の教説について簡単に論じているのと、J・パイパーやP・パーキンスがⅠペト3:8-9に見られる愛敵の教えの伝承史的背景について論じたに留まる[2]。本論考は、愛敵の教えも

1　原口尚彰「アガペーとしてのフィリア」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第32号、2014年、1-18頁; 同「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第１号、2016年、21-42頁、同「旧約・ユダヤ教における愛の主題」青山学院大学神学科同窓会基督教学会『基督教論集』第59号、2017年、87-107頁を参照。

2　C. Spicq, *Agape in the New Testament* (tr. M. A. McNamara / M. H. Richter; 3 vols; Eugene, Oregon: Wilf & Stock, 1963) II 342-365; J. Piper, *Love your Enemies* (Wheaton, IL: Crossway, 1979) 5-8; P. Perkins, *Love Commands in the New Testament* (New York – Ramsey: Paulist, 1982) 92.

含めた愛の主題に関わる本文を釈義的に検討して、ペトロ書簡の愛の主題についてより包括的な分析を加え、その全体像を解明したい。

2．ペトロ書簡の神学：予備的考察

ペトロ書簡における愛の教説を論じる前提として、ペトロ書簡の神学思想の全体像をスケッチしてみたい。Ⅰペトロ書はペトロの名前を冠してローマより小アジアの広範な地域に散在する教会に宛てた回状として書かれている（Ⅰペト1:1; さらに、ヤコ1:1; 黙示録1:1-3:22を参照）[3]。Ⅰペトロ書は、書簡導入部（1:1-2 発信人、受信人、祝祷句、1:3-12 神への讃美）、本文（1:13-5:11）、結語部（5:12-13 挨拶、5:14 祝祷句）から構成されており、書簡形式の点では、パウロ書簡、特に、Ⅱコリント書のスタイルに近い（神の讃美の部分が導入部に来る）[4]。神学思想の面では、贖罪論

3　P. J. Achtemeier, *1 Peter*（Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 1986）62; I. J. Michaels, *1 Peter*（WBC 49; Dalas: Word Books, 1988）xlix; J. H. Elliott, *1 Peter*（AB 37B; New York: Doubleday, 2000）12; L. Doering, “First Peter as Early Christian Diaspora Letter,” in *The Catholic Epistles and the Apostolic Tradition*（eds. K.-W. Niebuhr / R. W. Wall; Waco, TX: Bayler University Press, 2009）215-236, 441-457; T. Klein, *Bewährung in Anfechtung. Der Jakobusbrief und der Erster Petrusbrief als christliche Diasporabriefe*（Tübingen: Francke, 2011）182-224, 274-347; O. F. W. Horn, “Die Petrus-Schule in Rom,” in *Bedrängtnis und Identität. Studien zu Situation, Kommunikation und Theologie des 1.Petrusbriefes*（hrsg. v. du Toit; BZNW 200; Berlin: de Gruyter, 2013）5-13; K. M. Schmidt, “Ein Brief aus Babylon,” in *Der erste Petrusbrief. Frühchristliche Identität im Wandel*（hrsg. v. M. Ebner et al.; Freiburg: Herder, 2015）67-99を参照。

4　U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament*（8. durchgesehene Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2013）484-485; 原口尚彰『新約聖書概説』教文館、2004年、154-155頁を参照。これに対して、Achtemeier, 79-80はⅠペト1:2にプレーシュンセイエー（πληθυνθείη「ますます豊かになりますように」）という表現が使われていることを根拠に、むしろユダヤ教のディアスポラ書簡の定型に近いとしているが（ダ

への明示的な言及や義認論の継承を示す箇所があり（Ⅰペト2:21-25）、ペトロの名を冠した文書でありながら、パウロ神学との親近性を示している（ロマ3:21-26; ガラ2:15-21を参照）[5]。

この書簡の執筆目的は異邦人世界に散らされて、社会の様々な軋轢の中に生活している信徒たちに希望を持たせて励ますことである（Ⅰペト1:6-8; 4:12-19）。Ⅰペトロ書の読者の多くは霊的な新生を経た異邦人の回心者である（Ⅰペト1:14-15, 18; 2:9-10; 4:3-4）[6]。この書簡は受信人に対して、神の選びと予定（Ⅰペト1:1-2; 2:4-9; さらに、ロマ9:1-11:36; Ⅰテサ1:4; ヨハ17:6を参照）、召し（Ⅰペト2:9-10; さらに、Ⅰテサ4:7を参照）ということを強調する[7]。Ⅰペトロ書によれば、彼らは「神の予定に従って、聖霊によってイエス・キリストに従い、その血をかけて貰うために」（Ⅰペト1:2）

ニ4:1; 6:26テオドシオン訳を参照）、彼が挙げる二例はバビロン王の書簡であり、ユダヤ教のディアスポラ書簡ではない。

5 U. Schnelle, *Theologie des Neuen Testaments*（2. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2014）577-578; N. Brox, *Der erste Petrusbrief*（EKK 21; 2. durchgesehene und ergänzte Aufl.; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1986）47-51; 原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館、2009年、145頁を参照。これに対して、Achtemeier, 202-203; Elliott, 39-40は、パウロ書簡の贖罪論とは用語法がかなり異なる点があることを根拠に、パウロの影響を否定し、Iペトロ書の贖罪論は初代教会の共通の伝承に由来するとする。

6 Achtemeier, 51; Elliott, 96; Michaelis, 112-113 ; R. Feldmeier, *Der erste Brief des Petrus*（THKNT 15/1; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2005）29; G. Guttenberger, “Teilhabe am Leiden Christi,” in *Der erste Petrusbrief. Frühchristliche Identität im Wandel*（hrsg. v. M. Ebner et al.; Freiburg: Herder, 2015）112-114.

7 これに対して、T. SelandやA. Merktは diaspora（「離散」）というユダヤ的な言葉が使用されていることを根拠に、受信人がユダヤ人キリスト者であったと主張している。T. Seland, “The Critical Issues in the Quest for the First Readers of 1 Peter,” in *Bedrängtnis und Identität. Studien zu Situation, Kommunikation und Theologie des 1.Petrusbriefes*（hrsg. v. D. S. du Toit; BZNW 200; Berlin: de Gruyter, 2013）49-51; A. Merkt, *1.Petrus*（Teilband 1; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015）59-60を参照。

選ばれた人々である。

Ⅰペトロ書は旧約聖書の表象を援用しながら聖なる神の民としての教会論を展開する[8]。本来、神の民イスラエルに付与された約束や契約とは無縁だった異邦人信徒たちは、今や、「選ばれた部族、王的祭司、聖なる民」と呼ばれるに到った（Ⅰペト1:15-16; 2:9-10;さらに、出19:6; レビ19:2; 20:7-8を参照）[9]。彼らはキリストを見たことはないが、宣教の言葉を聞いて回心することを通して神の民となったのである。彼らは地上では様々な試練に遭わなければならないが、それは信仰の真価を示し、鍛えるためであると意味付けられる（Ⅰペト1:6-9）。迫害の中で終末の希望は高まり、信徒たちはイエス・キリストの来臨を待ち望んでいる（1:7）。終末待望の根拠となるのは、イエス・キリストの復活であり、それは信徒たちに「生ける希望」を与えたのであった（1:3）[10]。従って、彼らは、「彼（＝キリスト）を通して神を信じているのであり、神が彼（＝キリスト）を死者の中から甦らせ、栄光を与えた」（1:21ab）。著者は受信人である信徒たちに、「あなた方の信仰も希望も神に向けられている」と語り掛ける（1:21c）。

キリスト者の真の故郷は天にある（フィリ3:20; ヘブ13:14; さらに、Ⅰペト1:4も参照）。信徒にとって地上の生活は「仮の住まい」であり、彼らは、「異邦人」、或いは、「旅人」として日々を過ごしている（Ⅰペト2:11）[11]。キリスト教信仰を是認しない異教世界

8　Achtemeier, 67; Mittenberger, 116もこの点を強調する。

9　本稿における新約聖書の訳文はネストレーアラント28版に基づく、著者の私訳である。

10　Schnelle, *Theologie*, 566-567もこの点を強調する。

11　R. Feldmeier, *Die Christen als Fremde. Die Metapher der Fremde in der antiken Welt, im Urchristentum und im 1.Petrusbrief*（WUNT 64; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1992）; idem., *Der erste Brief des Petrus*（THKNT 15/1; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2005）9-10; Horn, 33-39; A. Obermann,“Fremd im Eignen Land,”*KD* 51（2005）263-289; C. G. Müller,“Auserwählte als Fremde,” in *Der erste Petrusbrief*.

での社会生活においても、彼らは証しとなるような生活が求められる（2:12）。著者は人間の立てた制度である政治権力に対しても主のために従い、常に善を行うことを勧める（2:12; 3:9）。さらに、信仰を共にする仲間への愛と市民的義務の遵守とを重ね合せて、「すべての者を尊重し、兄弟を愛し、神を畏れ、王を敬いなさい」と勧める（2:17）。

Ｉペトロ書は受難のキリストを、迫害を甘受し、善を行う信徒の模範として提示している（Ｉペト1:11; 2:21-25;さらに、ルカ23:44-49を参照）[12]。この書簡の著者は、「善を行いながら、苦難を受け、耐えるならば、それは神からの恵みである」と考えるが（Ｉペト2:20）、その模範がキリストの十字架である。Ｉペトロ書によると、「（キリストは）罪を犯さず、その口には悪意が見出されなかった。悪口を浴びせられても、言い返さず、苦しめられても人を脅さず、義しく裁かれる方に委ね、私たちの罪を身に負って木に架かったのは、私たちが罪に対して死んで義に生きるためである」（2:22-24）。ここではパウロ的な贖罪論・義認論が再構成されて、受難の神学となり、迫害の中でキリストの足跡に従うことが求められている（2:21）。

キリストは魂の牧者・監督者であるとされる（2:21-25; 5:4）。主（ヤハウェ）が牧者であり、イスラエルの民がその羊であるという喩えは、旧約聖書に遡る（詩23:1-6; 95:7; エゼ34:31-34を参照）。新約聖書はこの旧約的表象を前提にしながら、キリストが

Frühchristliche Identität im Wandel（hrsg. v. M. Ebner et al.; Freiburg: Herder, 2015）9-48を参照。

12 Guttenberger, 119-123; J. de Waal Dryden, *Theology and Ethics in 1 Peter*（WUNT 209; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2006）177-191; T. Popp, “ ‘damit ihr seinen Fußspuren nachfolgt（1 Petr 2,21）’. Christus als Leitbild der Lebenskunst im 1. Petrusbrief,” *ZNT* 17/34（2014）61-70; M. Vahrenhorst, *Der erste Brief des Petrus*（Stuttgart: Kohlhammer, 2016）125-126を参照。

牧者（羊飼い）であるという表象を生み出した。キリストが羊飼いであるという喩えはパウロ書簡には見られないが、ヨハネによる福音書には出て来る。キリストは羊のために自分のいのちを惜しまない良い羊飼いであるとされる（ヨハ10:11-16）。第四福音書の結びに出て来る復活顕現の物語では、ガリラヤ湖畔で復活のキリストが、ペトロに羊を飼う務めを与えている（ヨハ21:15-17）[13]。Ⅰペトロ書によると、教会指導者（長老）の務めは、大牧者であるキリストに倣って羊を飼う牧者のそれである（Ⅰペト5:1-4;ヨハ21:15-19）。パウロの時代は使徒や預言者といった巡回説教者が、福音の宣教者として諸教会を指導していた。これに対して、教会の制度化が進んだⅠペトロ書や牧会書簡の時代には、定住の聖職者が教会を指導する体制に移行していた。彼らの主たる職務は魂の牧者として、羊である信徒の魂の配慮をすることと考えられ、それは大牧者であるキリストより託されていることと理解されたのである。

Ⅱペトロ書は二世紀初頭において新約聖書の正典化に向かう傾向の存在を示す点と、終末の遅延の問題に取り組んでいることが注目される。新約時代には、後に新約聖書の一部となる個々の文書は存在し、回覧されて一定の影響を持っていたが、それらはまだ信仰と生活の規範である正典とはなっていなかった。新約聖書において、聖書（graphe）とは専ら旧約聖書のことである（マタ21:42; 26:54; ルカ24:27, 32, 45; ロマ1:1; 4:3; 9:17; Ⅰペト2:6; Ⅱペト1:20; 3:16他）。しかし、この書簡においては、新約時代に生み出された伝承や文書の一部が旧約文書同様に聖書として規範的意味を持ち始める現象が観察される。例えば、福音書伝承の山上の変貌の出来事を伝える言葉は、権威ある預言と理解されている（Ⅱペト1:16-21をマコ9:2-8並行と比較せよ）。他方、Ⅱペトロ書の

13　原口尚彰「アガペーとしてのフィリア」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第32号、2014年、9-10頁を参照。

背後にある教会では、パウロ書簡はパウロが特別な知恵を付与されて執筆した文書として聖書同様の権威を持っている。Ⅱペトロ書は、パウロ書簡には未熟な者には理解が困難な部分もあり、誤解や曲解の可能性があることを指摘し、警告している（Ⅱペト3:15-16）。

Ⅰペトロ書の時代には迫害下に強い終末期待が存在したが、さらに時代が下るⅡペトロ書の時代になると、終末の到来の遅延が意識され、終末期待が薄らいで来た。Ⅱペトロ書はこの状況を踏まえて、終末の遅延の問題を正面から取り上げている（2:16-21; 3:1-13）。著者は終末的緊張を失って行く信徒たちに対して、終末が必ず来ることを繰り返し語り、黙示的使信を再び強調して終末意識を喚起しようとする。

著者は終末の到来が遅れている事実に対して、「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようである」と語る（3:8）。つまり、神の時間を人間的な尺度で測ることは出来ず、終末の到来は人間の目には遅いように見えても主の目には遅いと言うことは出来ないのだから、終末は必ずやって来ると著者は主張する。終末がなかなかやって来ないのは、「誰も滅びに陥ることなくすべての人々が、悔い改めに到るため」である（3:9）。終末までの期間をすべての人々に救いの機会を与えるための世界伝道の時とするのは、共観福音書の小黙示録の中にも見られる理解である（マコ13:10並行）。

Ⅱペトロ書は初代教会の黙示的伝承を踏まえて、「主の日は盗人のようにやって来る」と述べて主の来臨の突発性を強調する（Ⅱペト3:10とⅠテサ5:2; マタ24:43を比較せよ）。終末の時には、天地は変容し、天は消え去り、全地は焼き尽くされる（Ⅱペト3:10-12; マコ13:24-25並行）。その後に、「主の約束に従って、義が宿る新天新地」の到来を待望するのである（Ⅱペト3:13; イザ63:17; 66:22）。

３．ペトロ書簡における愛の主題

3.1　語学的考察

ペトロ書簡において、名詞アガペー（agape「愛」）は３回使用されているが（Ⅰペト4:8; 5:14; Ⅱペト1:7）、名詞フィリア（philia「友愛」）は一度も使用されていない。動詞アガパオー（agapao）が５回（Ⅰペト1:8, 22; 2:17; 3:10; Ⅱペト2:15）使用されているのに対して、動詞フィレオー（phileo「愛する」）は全く使用されていない。しかし、兄弟愛を表す名詞フィラデルフィア（philadelphia「兄弟愛」）は３回用いられている（Ⅰペト1:22; Ⅱペト1:7［２回］）[14]。

名詞アガペートス（agapetos「愛すべき者」「愛されている者」）はペトロ書簡では３回使用されている（Ⅰペト2:11; 4:12; Ⅱペト1:17）。著者は読者にアガペートイ（agapetoi「愛されている者たち」）と呼び掛け、注意を喚起している（Ⅰペト2:11; 4:12）。Ⅱペト1:17は山上の変貌の出来事を想起しながら、キリストに「私の愛する子」と呼び掛ける言葉伝承を引用している（マタ3 :17; 17:5; マコ1:11; 9:7; 詩2:7; イザ42:1を参照）。他方、初代教会の習慣に従って、ペトロ書簡は信徒をアデルフォス（「兄弟」）と呼んでおり、ペトロ書簡全体において名詞アデルフォスは合計3回使用されている（Ⅰペト5:12; Ⅱペト1:10; 3:15）。その中で読者にアデルフォイ（adelphoi「兄弟たち」）と呼び掛けているのは1例であり（Ⅱペト1:10）、他の２例においては宣教者であるシルワノやパウロがアデルフォス（adelphos「兄弟」）と呼ばれている（Ⅰペト5:12; Ⅱペト3:15）。

ペトロ書簡において、アガプ（agap-）語群の使用頻度が比較的高い一方で、フィル（phil-）語群の使用例は、兄弟愛を表す名

14　詳しい語学的分析については、LSJ 1931 ; Bauer-Aland, 1712 ; H. von Soden, “ἀδελφός κτλ.,” *TWNT* I 144-46; E.Plümacher, “φιλαδελφία κτλ.,” *EWNT* III 1014-15を参照。

詞フィラデルフィア（philadelphia「兄弟愛」）の他にはないので（Ⅰペト1:22; Ⅱペト1:7［2回］）、ペトロ書簡の関心はギリシア的な友愛よりもキリスト教的な兄弟愛の方にあると言える。尚、新約聖書において名詞フィラデルフィアは使用頻度が低く、他ではパウロ書簡とヘブライ書に見られるだけであるので（ロマ12:10; Ⅰテサ4:9; ヘブ13:1）、ペトロ書簡の用語法はパウロの用語法に近いと言える。

憐れみを示すエレ（ele-）語群について言えば、動詞エレエオー（「憐れむ」）は2回（Ⅰペト2:10［2回］）、名詞エレオス（eleos「憐れみ」）は1回使用されている（Ⅰペト1:3）。動詞スプランクニゾマイ（splagchnizomai「同情する」、「深く憐れむ」）や名詞スプランクノン（splagchnon「同情」、「深い憐れみ」）は使用されていない。これらの語群が奇跡物語におけるキリストの憐れみを表現するのに重要な役割を果たしている共観福音書とは異なり、ペトロ書では異邦人の回心に関して神の憐れみを語る文脈で使用されている（Ⅰペト1:3; Ⅰペト2:10［2回］）。

3.2　愛の主題の展開

3.2.1　神の愛と神への愛

ペトロ書簡はヨハネ文書のように正面から論じることはしていないが（ヨハ3:16; Ⅰヨハ2:5, 15; 3:17; 4:8-12; 5を参照）、神の愛は愛についての議論の前提となっていると考えられる。例えば、著者は読者にアガペートイ（「愛されている者たち」）と呼び掛けるが（Ⅰペト2:11; 4:12）、この場合、信徒たちを愛する主体は、第一義的に神であり、第二義的に著者を含む他の信徒たちであろう。尚、神の子イエスが「私の愛する子」と呼ばれているが、一人称の主語は神を指し示しており、神の子イエスを愛し、特別な使命と権威を与えた主体は神自身である（Ⅱペト1:17; さらに、マタ3 :17; 17:5; マコ1:11; 9:7; 詩2:7; イザ42:1を参照）。

ペトロ書簡の受信人の大多数は異邦人信徒であると考えられるが（Ⅰペト1:14-15, 18; 2:9-10; 4:3-4）、著者は異邦人の回心を神の憐れみの出来事と考えている（Ⅰペト1:3; 2:10［2回］）[15]。神の民イスラエルの選びは救済史における神の愛の行為であり（申7:8, 13; 23:6; 代下2:10; 9:8; 箴3:12; ホセ3:1; 11:1; イザ43:4を参照）、神はその民を憐れむとされた（出20:6; 34:6; 申5:10; ホセ2:21, 25）[16]。今や神の選びの対象はイスラエル民族に限定されず、異邦人がキリストの福音の言葉を聞いて回心することを通して、新しく生まれて神の民に加えられ（Ⅰペト1:3, 23）、神の愛と憐れみを受ける可能性が開けたのである（ロマ9:23を参照）[17]。被造物全体への神の愛を語るのでなく、選ばれた神の民への愛を語るという点に限界はあるが、神の民に加わる可能性はユダヤ人、異邦人の区別を問わず万人に開かれることとなった。

キリストの愛について語るとき、パウロとは異なり（ロマ5:8; 8:39を参照）、Ⅰペトロ書の著者はアガペーや同根の動詞アガパオーを用いていない。しかし、この書簡は、「（キリストは）世界が創られる前に知られ、終わりの時に私たちのために顕された」と述べ、神の子キリストの受肉の出来事が、既に愛の行為であると考えている（Ⅰペト1:20）。さらに、キリストの地上の生涯における受難について、「キリストもあなたがたのために苦しみ」（2:21）、或いは、「私たちの罪を身に負って木に架かったのは、私たちが罪に対して死んで義に生きるためである」（2:24）と述べており、著者がキリストの苦しみと死が罪人に対する愛の行為であると考えていることを示している[18]。

15　Achtemeier, 94; Michaelis, 112-113.

16　Elliott, 330；原口尚彰「旧約・ユダヤ教における愛の主題」青山学院大学神学科同窓会基督教学会『基督教論集』第59号、2017年、87-107頁を参照。

17　Michaelis, 18を参照。

18　「私たちの罪を身に負って木に架かった」という句における「木」とは

信徒たちはこのキリストの愛に応えて、キリストを愛することが期待される。Ⅰペト1:8は、「その方をあなた方は見たことはないが愛しており、今見ることはなくても、信じて言葉に尽くせない、光栄に満ちた喜びを感じている」と語る。この箇所は目で見ることの出来ない復活のキリストに対する信徒たちの愛を語っている点で注目される[19]。初代教会の伝承では、十字架刑に処せられて死んだイエスが三日目に復活して弟子たちに顕れ（Ⅰコリ15:3-8)、弟子たちは復活した主を「見た」とされる（マタ28:17; ルカ24:36-43; ヨハ20:20, 25, 29)。しかし、復活のキリストの顕現に接し、肉体の目で見ることが出来たのは最初期のキリスト教指導者に限られている。第二世代以降の信徒に復活のキリストを目で見た者はない。彼らはキリストを直接見たことはなく、キリストの福音の言葉を聞いて回心した人々である[20]。信仰は見ることに起源するのではなく（ヨハ20:29)、聞くことから来るからである（ロマ10:17; さらに、Ⅰペト1:23を参照)。

3.2.2　兄弟愛

Ⅰペト1: 22は、信徒が互いに愛し合うことを勧め、そのことを兄弟愛と呼んでいる（Ⅰペト1: 22; 2:17; 3:10; Ⅱペト2:15）[21]。兄弟愛はキリストの福音の真理を受け入れて魂を清められた者が抱

十字架を指している（使5:30; 10:39; 13:29; ガラ3:13を参照)。この点については、L. Goppelt, *Der erste Petrus*（KEK 12; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978）209; P. H. Davids, *The First Epistel of Peter*（NIHCNT; Grand Rapids: Eerdmans, 1990）209; Michaelis, 148; Achtemeier, 202; Elliott, 533; Vahrenhorst, 128を参照。

19　C. Spicq, II 343-344もこの点を強調している。

20　Brox, 66; Goppelt, 102-103; K. H. Schelkle, *Die Petrusbriefe – Der Judasbrief*（Freiburg: Herder, 1976）36-37; P. H. Davids, *The First Epistel of Peter*（NIHCNT; Grand Rapids: Eerdmans, 1990）58-59; Michaelis, 32; Elliott, 342; Feldmeier, *Der erste Brief des Petrus*, 57-58もこの点を強調する。

21　Achtemeier, 137はこの点を強調する。

く基本的な倫理的徳目とされている（Ⅰペト1:22）[22]。パウロ書簡をはじめ新約文書の多くは初期キリスト教の伝統に従って、信仰と希望と愛をキリスト者の生きる姿勢を表す徳として挙げる（Ⅰコリ13:13; Ⅰテサ1:3; 5:8; エフェ 1:15-18; コロ1:4-5; ヘブ10:22-24; 黙2:19; バルナバ1:4, 6を参照）[23]。Ⅰペトロ書は信仰と希望と愛を列挙することはしていないが、信仰と希望が神に向けられていると述べた直後に（1:21）、信徒が互いに愛し合うよう勧めているのであるから、三つの事柄が相互に密接に関連すると考えている。神を信じ、神に希望を持つ者は、相互に愛し合うように招かれているのである。

Ⅱペトロ書において、キリスト者の基本的な生きる姿勢は、神へのエウセベイア（eusebeia「敬虔」）とフィラデルフィア（philadelphia「兄弟愛」）であるとされる（Ⅱペト1:7）。このことは、用語的にはエウセベイアのようなヘレニズム的用語を使用してはいても、内容的には律法の神髄を神への愛と隣人愛の二重の戒めによって総括する共観福音書伝承と並行している（マタ22:34-40; ルカ10:25-28; マコ12:28-34）。

ペトロ書簡において愛するように求められている「兄弟」とは、パウロ書簡の場合と同様に、信仰を同じくする教会共同体に属する信徒たちであり、教会の外の人々ではない[24]。しかし、Ⅰペトロ書は教会の外にいる異教徒たちに対して排外的ではなく、日常の社会生活の中で彼らを尊重し、協調することを勧めると共に敵対する者に親切にすることを求めてている（Ⅰペト2:17; 3:8-9）[25]。

---

22 「兄弟」とはキリスト教共同体の構成員ことであり、女性会員である「姉妹」も含んでおり、「兄弟愛」とは女性も含む会員間の愛のことを指していると考えられる。この点については、Elliott, 384-385を参照。

23 パウロの愛の教説について詳しくは、原口尚彰「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第１号、2016年、21-42頁を参照。

24 Goppelt, 129-130; Davids, 76-77.

25 Goppelt, 130.

他方、Ｉペトロ書は、「最後に、皆が同じ思いで、同情し、兄弟を愛し、憐れみ深く、へりくだり、悪に悪をもって、侮辱に侮辱をもって報いず、かえって祝福しなさい。あなたがたは祝福を継ぐために召されたのだから」と述べ（3:8-9）、相互性の原理を越える姿勢を示している。特に、「悪に悪をもって、侮辱に侮辱をもって報いず、かえって祝福しなさい」という部分は、「迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない」と勧めるパウロの愛敵の教えに内容的に近いが（ロマ12:14）、用語法はかなり異なっているので、両者の間に文書的依存関係はなく、共通の先行伝承に由来する別伝承にそれぞれが依拠しているのであろう[26]。マタイ福音書は第六反対命題の中で、隣人愛の戒めと対照する形で愛敵の教えを言及しており（マタ5:43-44）、隣人愛を越える愛の教えとして愛敵の主題を提示しているが、Ｉペトロ書はパウロ同様に共同体内の連帯を表す兄弟愛の延長として愛敵の主題を展開している（ロマ12:10, 14）[27]。初期キリスト教の様々な伝承に見られる愛敵の教えの最終的起源は、イエス自身の教えと生き方であろう（Ｉペト2:21を参照）[28]。

初期キリスト教の様々な文書が、周辺社会との軋轢や対立を前提にした勧告を与えているのは（マタ5:11-12;フィリ1:28-30; Ｉテ

---

26 Goppelt, 224-226; Brox, 152, 154; Achtemeier, 224; Elliott, 602; Vahrenhorst, 143; J. Piper, *Love your Enemies* (Wheaton, IL: Crossway, 1979) 5-8; P. Perkins, *Love Commands in the New Testament* (New York – Ramsey: Paulist, 1982) 92; K. Shimada, *Studies on First Peter* (Tokyo: Kyobunkan, 1998) 145-147を参照。

27 Davids, 124-125を参照。

28 Brox, 153; Achtemeier, 224; Elliott, 602-603; S. Luther, *Sprachethik im Neuen Testament. Eine Analyse des frühchristlichen Diskurses im Matthäusevangelium, im Jakobusbrief und im 1.Petrusbrief* (WUNT 2.394; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015) 179-181, 184; K. M. Schmidt, "Ein Brief aus Babylon," in *Der erste Petrusbrief. Frühchristliche Identität im Wandel* (hrsg. v. M. Ebner et al.; Freiburg: Herder, 2015) 67-99を参照。

サ1:6; 2:14他)、単なる理論的な可能性について論じているのではなかった。ユダヤ人信徒たちは、異端者としてユダヤ教徒から断罪される現実の可能性があった(マタ10:17; 24:9;ヨハ16:1-4; 使3:11-26; 4:11-22他)。他方、異邦人信徒はキリスト教に回心することを通して、先祖伝来の神々を拝む道を捨てて、天地の創造者なる唯一の神を信じる道に入った人々である(Ⅰテサ1:9-10; ガラ4:8-9; Ⅰコリ8:6他)。彼らはキリスト教信仰故に異邦人世界において宗教的マイノリティの地位に置かれるようになった[29]。周辺世界の多神教的文化世界において、複数の神々が並立し、主要都市の公共スペースにはギリシア・ローマの神々を祀る神殿が林立していた。唯一神教の立場に立つユダヤ教徒やキリスト教徒は、偶像礼拝を避けなければならないので他の神々を拝むことをしない(出20:4-6; 申5:8-10)。キリスト教に入信するとは、社会生活の上では町や同業組合の守護神を拝まず、共同体の祝祭に参加しないことを意味した。そのような生き方は周辺社会からは反社会的態度と見られ、民族同胞から反発や侮辱や迫害を覚悟しなければならなくなった(フィリ1:28-30; Ⅰテサ1:6; 2:14; Ⅰペト2:11-12; 3:8-17他)。

ディアスポラのユダヤ人が律法に従って、先祖伝来の宗教的習慣を守ることは歴代皇帝によって承認されていたので、彼らはギリシア系市民から共同体が攻撃された時に皇帝に対して保護を求めたのに対して(ヨセフス『古代誌』16.160-166; フィロン『ガイウス』155-158)、キリスト教にはそのような特権は与えられておらず、周辺世界からハラスメントや迫害を受けてもローマ帝国に保護を求めることは期待出来なかった。初期のキリスト教に入信

29 K. L. Schmidt, 96-99; K. Gabriel, "Ausstieg aus der Majoritätsgesellschaft," in *Der erste Petrusbrief. Frühchristliche Identität im Wandel* (hrsg. v. M. Ebner et al.; Freiburg: Herder, 2015) 49-66を参照。

することは、周辺世界が「迷信」（タキトス『年代記』「ネロ」15巻44節; スエトニウス『ローマ皇帝伝』「ネロ」16節）として排斥する宗教に、法的保護を持たずに無防備で加入する道を選択することを意味した。

二世紀になると状況はさらに悪化した。二世紀初頭にビトゥニア州とポントス州の総督であったプリニウスと皇帝トラヤヌスとの往復書簡によると、キリスト者であることが確認立証されればそのことだけを名目に処罰可能であるとされている（『プリニウス書簡集』10.96; 10.97）。総督が送った質問書に対して皇帝の返書は、総督が自らキリスト教信者を探し出す必要はないが、匿名ではない告発については審理を行い、被告人がキリスト教徒でない、あるいは、キリスト教信仰を捨てたことを立証出来なければ、処罰することが出来ると指示したのである（『プリニウス書簡集』10. 97）[30]。Ｉペトロ書はこのような以前よりも厳しくなった状況下に生きる信徒たちに対して書き送られている[31]。

４．結論

公同書簡に属するペトロ書簡は、一世紀末から二世紀初頭の異邦人中心のキリスト教会の一部が、初期キリスト教の愛の教説をどのように受容し、展開したかを示す一つの証言を与えている。初期キリスト教の愛の教説は一様ではなく、神への愛（申6:4-5）と隣人愛（レビ19:18）によって旧約聖書の戒めを総括し（マコ

30 A. Reichert, “Durchdachte Konfusion. Plinius, Trajan und das Christentum,” *ZNW* 93（2002）227-250を参照。

31 D. G. Horrell, *Becoming Christian: Essays on 1 Peter and the Making of Christian Identity*（London; Bloomsbury T & T Clark, 2013）100-132; Schmidt, 83-86; F. W. Horn, “Gute Staatsbürger. Zur politischen Ethik des 1.Petrusbriefs,” in *Ethos und Theologie im Neuen Testament*（hrsg.v. Flebbe, J. / M. Konrad; FS. M. Wolter; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2016）371-390を参照。

12:28-34並行)、さらには、それを越えたイエスの愛敵の教えの大切さを強調する（マタ5:43-48; ルカ6:27-36）共観福音書伝承の流れと、隣人愛の戒めを倫理の基本としながらも（ロマ13:9; ガラ5:13-14)、教会共同体の成員である信徒間の兄弟愛を強調し（ロマ12:10; 13:8; Ⅰテサ3:12; 4:9)、さらには、それを越えた愛敵の教えを展開するパウロ書簡の流れと（ロマ13:9-21)、専ら信徒相互が互いに愛し合うことや友愛を強調するヨハネ福音書の流れとが存在した（ヨハ13:34-35; 15:13-17)[32]。

Ⅰペトロ書の愛の教説は、兄弟愛（Ⅰペト1: 22; 2:17; 3:10; Ⅱペト2:15）と愛敵（Ⅰペト3:8-9）を強調しており、パウロの愛の教説の継承という性格が強い。この点では、ほぼ同時代にシリアで成立したと考えられるディダケー（十二使徒の教え）が、共観福音書伝承に基づいて（マコ12:28-34並行;マタ5:43-48; ルカ6:27-36を参照)、神への愛と隣人愛（ディダケー 1:1-2a)、さらには、愛敵（1:2b）を説いているのとは対照的である[33]。Ⅰペトロ書はペトロの名前を冠してローマから（Ⅰペト5:13)、小アジアの主要都市に位置する諸教会に宛てた書簡の形式で書かれている（1:1を参照)[34]。小アジアは宣教旅行の途上でかつてパウロが宣教活動を行った拠点地域であり（使19:1-40)、パウロの思想的影響は強かった。他方、ローマ帝国の首都ローマをパウロは訪れたことがないものの、その神学思想の集大成とも言えるローマ書をその地にある教会に書き送っており（ロマ1:1-7)、パウロの思想はローマの

32　原口尚彰「アガペーとしてのフィリア」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第32号、2014年、1-18頁; 同「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第１号、2016年、21-42頁を参照。

33　ディダケーの愛の教説の特色については、辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年、137-140頁を参照。

34　Achtemeier, 62; Elliott, 12; T. Klein, *Bewährung in Anfechtung. Der Jakobusbrief und der Erster Petrusbrief als christliche Diasporabriefe*（Tübingen: Francke, 2011）182-224, 274-347を参照。

信徒たちに詳細に知られていた。小アジアやローマと結びつきが強いⅠペトロ書の著者に、パウロ書簡の思想的影響が強く認められるのも当然であろう。

他方、Ⅱペトロ書はキリスト者の基本的徳目を、神への敬虔と兄弟愛をキリスト者が遵守すべき徳目として挙げている（Ⅱペト1:7)。この徳目リストは、用語や文学形式は全く異なっているが、内容的には律法の神髄を神への愛と隣人愛であるとする共観福音書伝承に近い（マタ22:34-40; ルカ10:25-28; マコ12:28-34)。

パウロの愛の教説の出発点は、キリスト通して示された神の愛である（ロマ5:8; 8:32, 39;ガラ2:20)。Ⅰペトロ書においても神の愛がその愛の教説の出発点であるが、特に、異邦人の回心という予想外の出来事を通して示された神の憐れみに焦点が当てられている（Ⅰペト1:3; 2:10[２回])。ユダヤ人の回心と異邦人の回心の主題は、パウロが既にローマ書９－11章において神の憐れみの出来事として採り上げている（9:23-24; 11:30-32)。人が救われるのはその努力の結果なのではなく、神の選びを通して現される恵みの出来事であるからである。Ⅰペトロ書はこうした思想を前提にしながら、救いへの選びと予定を強調し（Ⅰペト1:2)、異邦人信徒の回心と新生の出来事を神の憐れみと恵みの業としたのである（Ⅰペト1:3, 10)。

パウロはキリストの死と復活に関心を集中させており（ロマ1:3-4; 4:24; Ⅰコリ15:3-9; ガラ1:1; Ⅰテサ1:9-10; 4:14)、キリストの地上の生涯に言及することは、キリストが十字架の死に至るまで神の意思に従順であったことを強調するキリスト讃歌（フィリ2:6-9）以外には稀である。これに対して、Ⅰペトロ書はキリストの地上の生涯をより具体的に思い描きながら勧めを行い、その死のみならず苦しみも罪人に対する愛の証として強調している（Ⅰペト2:21; 2:24)。信徒たちはこのキリストの愛に応えて、キリストを愛することが求められている（1:8)。

兄弟愛は信徒の基本的な倫理的徳目とされる（Ⅰペト1:22）。Ⅰペトロ書によると神に希望を持つ者は、相互に愛し合うように招かれている（1:21）。兄弟愛は信徒相互間の愛であるが、Ⅰペトロ書は兄弟愛の射程を拡大して、「すべての者を尊重し、兄弟を愛し、神を畏れ、王を敬いなさい」と勧め（2:17）、教会の外にいる異教徒たちに対しても、社会生活の中で彼らを尊重することを勧めている。さらに、Ⅰペトロ書は、敵対する者をも兄弟愛の対象とし、悪に対して悪をもって報いることなく、祝福するように求めている（3:8-9）。この勧めは兄弟愛を強調しながらも、共同体外の人々を愛することも重視し、迫害する者に対しても祝福を祈るように勧めるパウロの倫理教説を直接に引用してはいないが（ロマ12:9-21を参照）、神学思想史的にはその延長線上に位置付けることが出来よう。

【参考文献】

１．邦語文献

川村輝典「ペテロの第一の手紙」『総説新約聖書』414-420頁
同「ペテロの第二の手紙」『総説新約聖書』421-425頁
速水敏彦「ペトロの手紙一」『新共同訳新約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局、1991年、410-431頁
同「ペトロの手紙二」『新共同訳新約聖書注解Ⅱ』432-443頁
N・ブロックス（角田信三郎訳）『ペテロの第一の手紙』（EKK 聖書註解XXI）、教文館、1995年
R・マーティン「ユダ書・Ⅰペトロ書・Ⅱペトロ書の神学」A.・チェスター／R・マーティン（辻学訳）『公同書簡の神学』新教出版社、2003年、110-215頁
辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年
原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004年
同「ディアスポラ書簡としての初期キリスト教書簡」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第31号、2013年、1-18頁
同「アガペーとしてのフィリア」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第32号、2014年、1-18頁

同「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第１号、2016年、21-42頁
同「旧約・ユダヤ教における愛の主題」青山学院大学神学科同窓会基督教学会『基督教論集』第59号、2017年、87-107頁

２．外国語文献

Achtemeier, P.J. *1 Peter* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress,1996).

Batten, A. J. / J. C. Kloppenborg. *James, 1 & 2 Peter and Early Jesus Traditions* (London: Bloomsbury, 2014).

Bauckham, R. J. *Jude; 2 Peter* (WBC 50; Waco: Word, 1983).

Breytenbach, C. " 'Christus litt euretwegen.' Zur Rezeption von Jesaja 53 LXX und anderen frühjüdischen Traditionen im 1.Petrusbrief," in *Deutungen des Todes im Neuen Testament* (hrsg. v. J. Frey / J. Schröter; WUNT 181; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 437-454.

Brox, N. *Der erste Petrusbrief* (EKK 21; 2. durchgesehene und ergänzte Aufl.; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1986).

Davids, P. H. *The First Epistel of Peter* (NIHCNT; Grand Rapids: Eerdmans, 1990).

Doering, L. "First Peter as Early Christian Diaspora Letter," in *The Catholic Epistles and the Apostolic Tradition* (eds. K.-W. Niebuhr / R. W. Wall; Waco, TX: Bayler University Press, 2009) 215-236, 441-457.

_____. "Gottes Volk. Die Adressaten als 'Israel' im Ersten Petrusbrief," in *Bedrängnis und Identität. Studien zu Situation, Kommunikation und Theologie des 1. Petrusbriefes* (hrsg. v. D. S. du Toit; BZNW 200; Berlin: de Gruyter, 2013) 81 - 113.

_____. *Ancient Jewish Letters and the Beginnings of Christian Epistolography* (WUNT298; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2012).

Dettinger, D. "Leben in Annäherung und Abgrenzung. Zur Intention christlicher Lebensführung im Ersten Petrusbrief," in *Ehe - Familie - Gemeinde. Theologische und soziologische Perspektiven auf frühchristliche Lebenswelten* (hrsg. v. D. Dettinger / C. Landmesser; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2014) 135 - 155.

Du Toit, D. S. (Hg.). *Bedrängtnis und Identität. Studien zu Situation, Kommunikation und Theologie des 1.Petrusbriefes* (BZNW 200; Berlin: de Gruyter, 2013).

Ebner, M et al. *Der erste Petrusbrief. Frühchristliche Identität im Wandel*

(Freiburg: Herder, 2015).
Elliott, J. H. *1 Peter* (AB37B; New York: Doubleday, 2000).
Feldmeier, R. *Die Christen als Fremde. Die Metapher der Fremde in der antiken Welt, im Urchristentum und im 1.Petrusbrief* (WUNT 64; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1992).
_____. *Der erste Brief des Petrus* (THKNT 15/1; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2005).
Flebbe, J. / M. Konrad (Hg.), *Ethos und Theologie im Neuen Testament* (FS. M. Wolter; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2016).
Frey, J. et al. (Hg.). *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (WUNT 246; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009) .
Furnish, V. *The Love Command in the New Testament* (Nashville - New York: Abingdon, 1972).
Gielen, M. "Der 1.Petrusbrief und Kaiser Hadrian. Zur Frage der zeitgeschichtlichen Einordnung des 1.Petrusbriefes," *BZ* 57 (2013) 161-183.
Giesen, H. *Jesu Heilsbotschaft und die Kirche. Studien zur Eschatology und Ekklesiologie bei den Synoptikern und im ersten Petrusbrief* (Lueven: Leuven University Press, 2004).
Goppelt, L. *Der erste Petrus* (KEK 12; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978).
Grünstäudl, W. "Petrus, das Feuer und die Interpretation der Schrift. Beobachtungen zum Motiv des Weltenbrandes im zweiten Petrusbrief," in *Der eine Gott und die Geschichte der Völker. Studien zur Inklusion und Exklusion im biblischen Monotheismus* (hrsg. v. L. Neubert / M. Tilly; BTS 137; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Theologie, 2013) 183 - 208.
Horrell, D. G. *Becoming Christian: Essays on 1 Peter and the Making of Christian Identity* (London; Bloomsbury T & T Clark, 2013) .
Herzer, J. *Paulus oder Petrus? Studien zum Verhältnis des ersten Petrusbriefes zur paulinischen Tradition* (WUNT 103; Tübingen: Mohr-Siebeck,1998).
Horn, F. W. "Gute Staatsbürger. Zur politischen Ethik des 1.Petrusbriefs," in *Ethos und Theologie im Neuen Testament* (FS. M. Wolter; hrsg. v. J. Flebbe / M. Konradt; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2016) 371-390.
Hübner, H. *Biblische Theologie* (3 Bde; Göttingen: Vandenhoeck &

Ruprecht, 1990-95).
Klein, T. *Bewährung in Anfechtung. Der Jakobusbrief und der Erste Petrusbrief als christliche Diasporabriefe* (Tübingen: Francke, 2011) .
Konradt, M. *Christliche Existenz nach dem Jakobusbrief. Eine Studie zu seiner soteriologischen und ethischen Konzeption* (SUNT 22; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998).
Kraus, T. *Sprache, Stil und historischer Ort des zweiten Petrusbriefes* (WUNT 2.136; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2001).
Lambur, J. *Die sozial-historische Situation im 1. Petrusbrief* (München: Grin Verlag, 2014).
Lüdemann, G. *Paulus, der Heidenapostel* (FRLANT 139; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987) .
Luther, S. *Sprachethik im Neuen Testament. Eine Analyse des frühchristlichen Diskurses im Matthäusevangelium, im Jakobusbrief und im 1.Petrusbrief* (WUNT 2.394; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).
Merkt, A. *1.Petrus* (Teilband 1; Vandenhoeck & Ruprecht, 2015).
Metzner, R. *Die Rezeption des Matthäusevangeliums im 1. Petrusbrief : Studien zum traditionsgeschichtlichen und theologischen Einfluss des 1. Evangeliums auf den 1. Petrusbrief* (WUNT 2.74; Tübingen: Mohr-Siebeck,1995).
Paulsen, H. *Der zweite Petrusbrief und der Judasbrief* (KEK 12/2; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992).
Perkins, P. *Love Commands in the New Testament* (New York – Ramsey: Paulist, 1982).
Piper, J. *Love your Enemies* (Wheaton, IL: Crossway, 1979).
Popp, T. " 'damit ihr seinen Fußspuren nachfolgt (1 Petr 2,21)'. Christus als Leitbild der Lebenskunst im 1. Petrusbrief," *ZNT* 17/34 (2014) 61 - 70.
Merkt, A. *1.Petrus* (Teilband 1; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015) .
Michaelis, J.R. *1 Peter* (WBC 49; Waco, TX: Word Books, 1988).
Reichert, A. *Eine urchristliche praeparatio ad martyrium. Studien zur Komposition, Traditionsgeschichte und Theologie des 1.Petrusbriefes* (Bern – New York: Peter Lang, 1989).
_____. "Durchdachte Konfusion. Plinius, Trajan und das Christentum," *ZNW* 93 (2002) 227-250.
Riedl, H. J. *Anamnese und Apostelität. Der zweite Petrusbrief und das*

theologische Problem neutestamentlicher Pseudepigraphie (Bern – New York: Lang, 2005).

Röhser, G. "Sünde und Sündlosigkeit im 1.Petrusbrief und vergleichbaren Texten," in *Ethos und Theologie im Neuen Testament* (FS. M. Wolter; hrsg. v. J. Flebbe / M. Konradt; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2016) 391-414.

Ruf, M. G. *Die heiligen Propheten, eure Apostel und ich. Metatextuelle Studien zum zweiten Petrusbrief* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2011).

Schelkle, K. H. *Die Petrusbriefe – Der Judasbrief* (Freiburg: Herder, 1976).

Schmidt, E. D. "Die Gnade des Leidens. Die Positionierung des ersten Petrusbriefes im Gegenüber zum Epheser- und zum Jakobusbriefes," in *Bedrängtnis und Identität. Studien zu Situation, Kommunikation und Theologie des 1.Petrusbriefes* (hrsg. v. D. S. du Toit; BZNW 200; Berlin: de Gruyter, 2013).

_____. "Dienen zu Gottes Ehre. Die Doxologien im 1.Petrusbrief und ihr Beitrag zu einer 'doxologischen Ethik'," in *Metapher–Narratio–Mimesis – Doxologie. Begründungsformen frühchristlicher und antiker Ethik* (hrsg. v. U. Volp / F. Horn / R. Zimmermann; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2016) 403-420.

_____. "Kult und Ethik: Leben 'heiliger' Gemeinden. Der Heiligkeitsbegriff in ethischen Begründungszusammenhängen im 1. Petrusbrief," in *Ethische Normen des frühen Christentums. Gut - Leben - Leib - Tugend.* (hrsg. v. F. W. Horn / U. Volp / R. Zimmermann; WUNT 313; Tübingen: Mohr Siebeck, 2013) 225 - 255.

Schmidt, K. M. *Mahnung und Erinnerung im Maskenspiel. Epistolographie, Rhetorik and narrativik der pseudepigraphen Petrusbriefe* (Freiburg: Herder, 2003).

_____. "Stimme des Apostels erheben. Pragmatische Leistungen der Autorenfiktion in den Petrusbriefen," in *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (hrsg. v. J. Frey et al.; WUNT 246; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009) 625-681.

Schnelle, U. *Einleitung in das Neue Testament* (8. durchgesehene Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2013).

_____. *Theologie des Neuen Testaments* (2. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2014).

Shimada, K. *Studies on First Peter* (Tokyo: Kyobunkan, 1998).

Söding, T. *Das Liebesgebot bei Paulus* (Münster: Aschendorff, 1995).

_____. *Die Trias Glaube, Hoffnung, Liebe bei Paulus. Eine exegetische Studie* (SBS150; Stuttgart: KBW, 1992).

_____. *Nächstenliebe. Gottes Verheissung und Anspruch* (Freiburg i.B.: Herder, 2015).

Söding, T. (Hg.). *Hoffnung im Bedrängtnis. Studien zum ersten Petrusbrief* (Regensburg: Pustet, 2009).

Spicq, C. *Agape in the New Testament* (tr. M. A. McNamara / M. H. Richter; 3 vols; Eugene, Oregon: Wilf & Stock, 1963).

Vahrenhorst, M. *Der erste Brief des Petrus* (TKNT 19; Stuttgart: Kohlhammer, 2015).

Vögtle, A. *Der Judasbrief; Der zweite Petrusbrief* (EKK 22; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1994).

Wischmeyer, O. *Liebe als Agape. Das frühchristliche Konzept und der moderne Diskurs* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).